

1. 目的・概要

the purpose and an outline

ものづくり・人づくりはフォーミュラタイプのレーシングカーを製作し、全日本学生フォーミュラ大会に出場することを通じて、社会に通じる能力を育てることを目的としている。

受講生はフォーミュラカーの設計、製作の他に、スポンサーとの交渉などを通じてものづくりはもちろんのこと、目標の立て方、工程の管理、組織の運営、広報能力、お金の使い方などを学び、人として成長していくことができる。

設計等では機械系の学生ですらも授業よりはるかに進んだ実践的な範囲に踏み込むため、教師に頼らない独自の勉強にもなります。また、通常の授業では身につかないスケジュール管理、つまり予想外のトラブルへの対応やそれを見越した柔軟性の高いスケジュールが身につけることができる。



annual schedule

2013年	5月~8月	関西合同走行会
	9月	全日本学生フォーミュラ大会 技術交流会(上智大学主催)
	10月	鈴鹿サーキットデモラン・展示
	11月	日産自動車株式会社主催車両設計講座 株式会社鬼頭歯車様訪問
	12月	静的種目勉強会&車検講習会(名古屋大学主催) ダイハツ工業株式会社様へ大会報告 SolidWorks(3DCADソフトウェア)講習会
2014年	3月	株式会社エクセディ様訪問 ダイハツ工業株式会社様による溶接講習会 静的勉強会・技術交流会(大阪大学主催) 車両運動設計勉強会(大阪大学主催)

2. 成果達成度

the achievement degree

・第11回全日本学生フォーミュラ大会

2013年度の第11回全日本学生フォーミュラ大会では日本大会が世界大会シリーズの一環に引き上げられ、参加校のレベルが上がる中2012年度に引き続き総合成績第3位(参加私立大学中最高位)を獲得した。特に静的審査に於いてはデザイン(設計)審査で決勝進出の5位、コスト審査で1位、プレゼンテーションで4位となり、静的審査全体では2位という結果となった。

・鈴鹿サーキット記念走行

11月にモータースポーツでは世界的に有名な鈴鹿サーキットでの記念走行を行いました。これはスーパーフォーミュラ最終戦に伴うイベントとして第11回全日本学生フォーミュラ大会出場校によって行われたデモ走行である。この走行では当プロジェクトの車両が先頭を務め、1万1000人もの観客の方々に御覧頂いた。



・東京モーターショー

東京モーターショーは世界3大モーターショーの1つであり世界中から注目されているイベントである。開催期間中には国内外からおよそ90万人の来場客があり非常に多くの方々に同志社大学の名前を知っていただけた。



・スポンサー

スポンサー企業からのご支援では長年ご支援頂いている川崎重工業様から2013年型のエンジンのご支援、LENOVO株式会社から100万円相当のハイエンドワークステーションPC2台のご支援があった。今年度新たに京田辺市の株式会社ヒロミツ製作所様にアルミ切削部品をご支援していただくことになるなど、大小様々な企業の方々からご支援を頂き、その規模は年々大きくなりつつある。

3. プロジェクトを通じて

through a project

フォーミュラカーという一つの商品を作り上げるためには多くの困難と、それに打ち勝つ努力が必要である。設計段階ではそれぞれの部品の相反する要求のために衝突することもあったし、事故によって部品が損傷を受け、徹夜で修理したこともあった。

大会前の1か月ほどは毎週のように大阪の泉大津フェニックス埋立地に通り猛烈な日差しと潮風に吹かれながら試験走行を行ったし、静的競技のために1000ページを超える報告書を作成したりもした。

これらの努力は大会での全種目無事完走につながり、静的審査成績2位や総合成績3位という結果につながっている。

全ての活動の結果が明確に結果につながっているため、どの作業も「適当に」やるという事ができない。メンバーが緻密な歯車のように連携しながら、なおかつ自分の仕事の結果が全て目に見えるプロジェクトである。

3月をもって今期のプロジェクトは終了してしまうが、私達の仕事が来年度9月の全日本学生フォーミュラ大会で実を結ぶことを願っている。

[編集後記]

成果報告は通常ならば何かを成し遂げた後に書くものであるが、このプロジェクトでは私たちは自分の関わった成果の結果が出るのは科目が終わった半年後だ。だからこそ、世代間で得たものを受け継いでいくことが重要となる。

このプロジェクトが私立大学で一番という成績まで至れたのは設計やマネジメントに関して様々な助言を下された中村先生、今までの下地を作ってくださった先輩方、精力的に協力してくれた機械研究会の仲間たち、様々な形で支援を頂いたスポンサー企業の皆様方のおかげである。

最後に、1年間苦楽を共にしたプロジェクトメンバーに、ありがとう。

[プロジェクトメンバー]

麻生 海(理工2) 伊藤 康成(理工2) 田中 隆太(理工2) 齊藤 光信(理工2) 新野 寛人(理工2) 西上 諒太(理工3)
山岸 龍明(理工4) 池下 義人(生命医科2) 菅谷 唯(TA)